

山形県立山形東高校③ (山形市)

国を動かす気概は校歌から？



「高校とは思えないハイレベルな授業だった」と山家公雄さん

山形東高校は東北有数の進学校だ。「入学時には多くの生徒が、大学は東北大か、あわよくば東大と思っているのでは」と話すのはエネルギー戦略研究所長の山家公雄さん(60、1975年卒)。1浪して東京大学に進学したが、浪人中は「合格の保証はなく、地元にはそれなりの立場で帰りたいという気持ちもあり、つらい1年だった。今でもあの1年を過ごした東京・お茶の水近辺を歩くと、胸がキュンとする。大学卒業後は日本開発

銀行(現・日本政策投資銀行)へ。融資で電力業界を担当したこともあり、その分野に詳しくなった。2009年から現職。「日本は再生可能エネルギーをもっと増やせる」が持論だ。

「荒城の月」と同じ土井晩翠作詞、「早春賦」でも知られる中田章作曲の校歌には、「国家の運命を……」という歌詞がある。「日本をリードする立場になろうという気持ちは、校歌を何度も歌っている間に植え付けられるのかな」

経済産業省の貿易経済協力局長や内閣府の知的財産戦略推進事務局長を務めた横尾英博さん(57、77年卒)は、中学生で「オイルショック」を経験した。対応に慌てる政府の様子に「こんな日本じゃだめだ」。国を動

かすような仕事があったと思うようになった。高校時代は合唱部で部長を務め、東北大会に出場した3年生の10月まで部活動に熱中。受験勉強に集中し始めたのが遅かったこともあり、東大に落ちたときは「やっぱりか」。しかし翌年に雪辱を果たした。

経産省で印象に残ることの一つは、資源を有効利用する「家電リサイクル法」の成立に携わったこと。「制度を変えて、国民生活をいい方向に持っていけたと思う」



「今でも正月と盆には山形に帰省する」と横尾英博さん



「合唱部の友人と、暇があれば声を合わせていた」と岸郁子さん

弁護士岸郁子さん(47、87年卒)は山形市立の中学校出身。高校には山形大学附属中学出身の生徒が大勢いて、最初の印象は「あれ、なまっでないぞ」。しかも社交的。「こういう人たちが着々と人生を歩むんだろうなあ」と感じた。進路を考える2年生のころには、「地味にやっていた」という自身と比べつつ、「私には企業への就職は向いてないから、資格をとろう」。

東北大学を経て弁護士に。交通事故の補償などを主に扱うが、昨年9月からバスケットボールの新リーグ「Bリーグ」の監事も務める。「弁護士はさまざまな場に食い込み、いろいろな人に会えるところが楽しい」